

# ふるさとのお宝再発見

95



この特集をさらにご希望の方は、新聞販売店かお近くのコンビニでお求め下さい

うる階段。側桁、欄木、手すり。下部側面(写真左)と、上部からは下す



片倉組本部事務所は1910(明治43)年、片倉組発祥の地外製糸場構内に建設され、活版部を併設して本部の事務を扱いました。組織の発展に伴い逐次事務が東京本社に移管され、川岸事務所となり、その後活版印刷部は独立し、47(昭和22)年設立された中央印刷社となり、その後本社は東京に移転し、現在は岡谷工場の事務所となっています。



## 不思議な階段に秘めた思いとは!?

### 国登録有形文化財 旧片倉組本部事務所(現中央印刷社屋)

光彩を放っています。

設計者・施工者とも不明ですが、詳細を見るにつけ都会の才能豊かな設計者が携わっていたと考えられます。中央線が岡谷まで延伸したのが05(明治38)年ですから常駐でなくとも十分可能であったと考えられます。また、片倉組の建設と同様に、片倉の建築部が担当して設計者を交えながら建設したとも考えられます。片倉組の設計者森山松之助は06(同39)年から台湾で活動していますから、この事務所の設計者である可能性は少ないと考えられます。

華麗にして、とても不思議な階段!! 設計の意図は?

こうした建物の階段のデザインは設計者の感性、腕の見せ所でもあります。直、折れ、回り

階段の基本は①蹴上げの高さを同じにする(高さが違つとすいりたり空足を踏んで危険です)②一定の条件の元で踏面の長さが一定であること(階段の上り、下りは同じリズムが必要で、そのためには踏面の長さが一定であることが大事です。

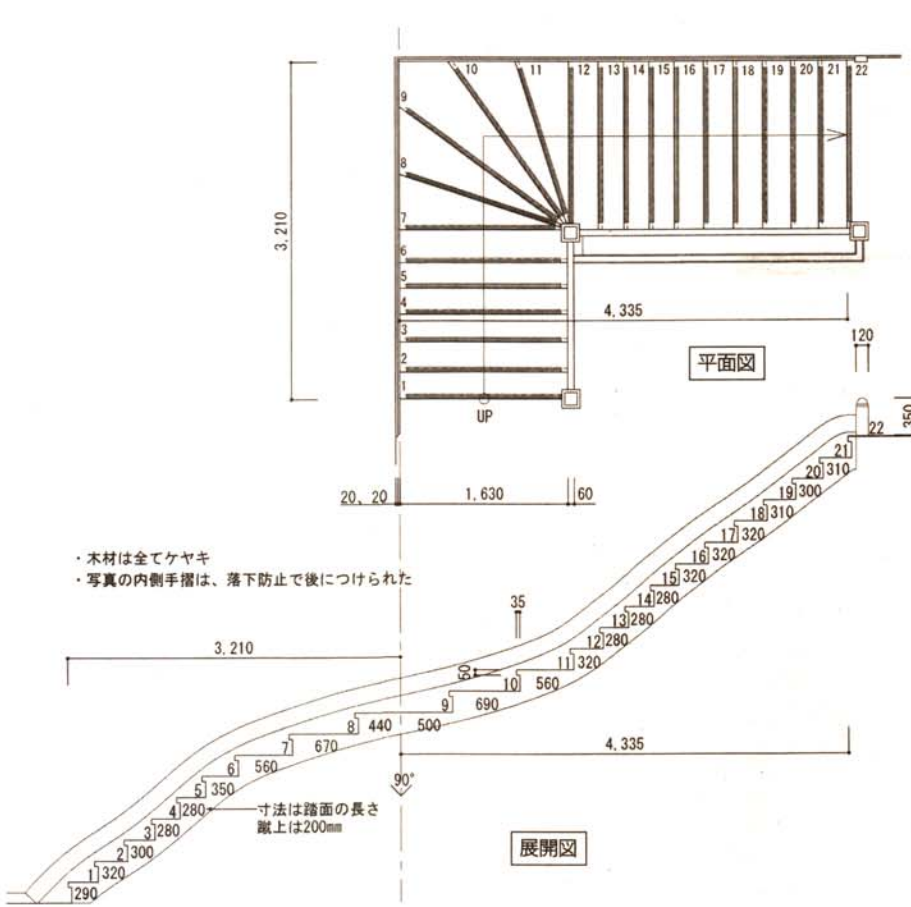


応接に置かれたステンドグラスを組み込んだ家具。扉には松の象眼、日本の指物師の技が光る

この片倉本部事務所の階段の構成は、過去見たことがありません。直角な折れ階段と回り階段の組み合わせで、それ自体はよくある階段なのですが、階段の踏面の長さに変化を与えた一般的には考えられない階段です。

回りの部分でも基本的には角度を同じにして中心から一定の部分で長さを合わせます。手すりの高さも基本的には踏面の先端から一定にするため曲がり部分を除いて階段の角度に合わせて直線になります。

面の長さを一定の規則に従って変える必要があります。階段の基本にはあり得ないことなのです。現場で採寸してみました(図面参照)。4段を超える長さで6段以上もあるうかという分厚い堅い欄木、手すりの角材(笠木)が乗っているような形状に一本材を加工しているを緩やかな傾斜に合わせた曲線に加工しています。曲げ加工は無理ですから大きい材を削り込んで造っています。踏み面の板の長さの種類は蹴込み部分35mmを加え、280mm、290mm、300mm、310mm、320mm、330mm、340mm、350mm、なんと6種類もあります。原寸を起こして加工し仮組をして確認した上で、現場に持ち込むといった手間のかかる、至難の技で高い技術も要求され、さらには狂い



・木材は全てケヤキ  
・写真の内側手摺は、落下防止で後につけられた



瀟洒な外観。柱は飾り位置は東西で異なる。東西の屋根には各2カ所にドーマー窓が付いている



屋根の棟飾りに輝く片倉の家紋「丸に濃い鷹の羽」

(岡谷市文化財保護審議会委員、諏訪市文化財専門審議会委員で、諏訪総合設計代表の宮坂正博さんに執筆いただきました)



入り口の片倉の記念碑

平面詳細と側桁展開図

次回は上ノ平城跡(箕輪町)を紹介しします。